

会員の声

国際会議の事務局の仕事を経験して

三井化学産資(株) 赤名 陽子

2006年に横浜で開催された「第8回国際ジオシンセティックス会議」(8ICG)が終了し、早いもので2年半の年月が経とうとしています。私はその会議の事務局としてこの会議の実行委員会に参加し、準備・運営のお手伝いをいたしました。長いスパンで考えると、ひとつの大きなイベントが終了するとまた次の新たなイベントが始まり・・・という大きな時間の流れのほんの一部分であったのかもしれませんが、私にとっては非常に内容の濃い4年間であったと感じています。ちょうど、次のブラジル会議(9ICG)のアブストラクトの締切の時期だということを知り、同じ頃、このジオシンセティックス技術情報の「会員の声」の執筆を仰せつかり、当時のことを少し振り返ってみたいと思います。

会議開催の4年前にIGS日本支部内に8ICGの実行委員会が設置され、私は当時の上司から実行委員会の事務局の話を打診され、普段の業務とは違う仕事に興味を持ち、引き受けることにしました。引き受けたものの、当初は事の重大さをあまり認識しておらず、お手伝い感覚でいたので、周囲の方々は恐々としていたのではないかと思います。その後は、会議開催までの限られた時間の中で準備に明け暮れる毎日で、自分の置かれている立場の重要性を否応なく認識させられました。実行委員会事務局の仕事は、それまで職場で担当していたデリバリー業務とは全く異なり、さらに国際会議も経験したことのない私にとって、戸惑いの連続でしたが、それとともに得たものは大きかったと思います。(身近なところで言えば、会議の議題書・資料の準備から終了後の議事録の作成等、今の仕事にも役に立っています。)

そしてこの会議は準備に携わった様々な方々やご協力頂いた多くの方々のご尽力によるものであったことも忘れてはなりません。どんなにコンピュータが発達しインターネット上で世界各地とオンラインでつながり、処理がシステムティックになっても、最終的には人の手(マンパワー)が不可欠なのだということを実感しました。投稿された論文の対応、会議参加の依頼・宣伝、その他の細部にわたる作業(ここに挙げる事ができないほどいろいろな作業がありました)等、人間がひとつひとつ、こつこつと時間をかけて作業あるいは確認をしていかなければ成り立たなかったことばかりでした。この場を借りて(ずいぶんと時間が経ってしまっていますが)お礼を申し上げたいと思います。

準備に携わった4年という期間は非常に長かったですが、開催日が決まっていたそれに向かって進んでいくという時間の流れは非常に早く感じました。何もなくても時間だけが経っていくという感覚は大学入試の受験勉強の時以来でした。残り100日を切ると、焦りの気持ちが増幅する半面、後はやれることしかできないと冷静に判断する気持ちも出てきて、開催日までを過ごしたことを思い出します。ブラジル会議の実行委員会の方々もきっと同じような気持ちで準備されていることだと思います。地球の裏側から、2010年のブラジル会議の成功をお祈りしております。